

資料

秀明大学看護学部紀要
P.63-71 (2023)コロナ禍で実施された看護系大学における臨地実習の課題についての文献検討
A Literature Review on the Challenges of Nursing Practice at Nursing Universities During the Corona Crisis.鈴木育子¹⁾

Ikuko Suzuki

要旨

目的：本研究の目的は、文献検討を通して、看護系大学で実施したコロナ禍の臨地実習への対応内容と得られた学修課題について検討することである。

方法：2020～2022年の期間で検索キーワード「看護基礎教育」、「臨地実習」、「コロナ禍」で、データベースは医学中央雑誌 Web 版 (Ver. 5) を用いて検索した。検索によりヒットした文献から本研究の目的に該当した 16 文献を分析対象とした質的記述的研究である。

結果：実習内容・形態の変更は、1) 臨地実習日数・時間の短縮、臨地と学内をミックスした実習形態、2) 学内実習、3) リモート実習の 3 つに分類され、変更された臨地実習の学修課題は、【看護の知識】、【看護の技術】、【看護活動】、【教育方法】、【教育環境】、【学習行動】の 6 つのカテゴリーに分類された。

考察：カテゴリーのコードから、人間の五感を使って得られた情報を統合し、分析した結果から導かれる個性のある看護の根拠や方法の説明は、シミュレーションでリアリティを追求しても実在する患者の心身の状態に伴う症状や心情を再現することは困難があり、また、対象となる患者や療養者の病状や価値観、家庭環境、居住地域の特性、職場環境などは多様性があり、リアリティを求めて実習内容を構成しても臨地実習と同等学習環境を整えるには限界があったと考えられた。

キーワード：臨地実習 実習方法 学修課題 コロナ禍

Key Words：nursing practice, practice method, achievement tasks, corona crisis.

I. 緒言

2020年1月から現在まで、看護系大学における臨地実習は、多様な対応の中で実施されてきた。その背景には、新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）拡大の影響があった。厚生労働省は、2020年1月6日付けで、中国武漢で原因不明の肺炎が確認されたことを受けて注意喚起をした¹⁾。その後、原因が COVID-19 であることが WHO によって確認された。COVID-19 はパンデミックとなり、日本では 7 回の感染者急増の波を経て 2 年 9 か月が経過し現在に至っている。

厚生労働省より、「新型コロナウイルス感染症発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設

等の対応について^{2) 3)}（及び実習施設への周知事項について⁴⁾」の 3 度の事務連絡があり、令和 2 年 6 月 22 日付けで、「新型コロナウイルス感染症に伴う看護師等養成所における臨地実習の取り扱い等について」⁵⁾ 事務連絡があった。COVID-19 拡大により実習施設の確保困難に対する対応及び実習中止、休校が生じた場合、代替学修による必要な単位等取得によって国家試験受験資格を認める内容だった。

COVID-19 の拡大に対して厚生労働省・文部科学省からの臨地実習への対応に関する対策方針が示されたこともあり、臨地実習の実施は大幅な変更をせざるを得なかったため、学生に大きな影響を及ぼしたと考えられた。臨地実習は、保健師助産師看護師学校養成所指定規則において、卒業（修了）に必要な 97 単位（第 4 次改正カリキュラム）⁶⁾ 中 23 単位を占めており重要な位置づけとなっていた。また、文部科学省は看護

1) 秀明大学看護学部

1) Faculty of Nursing, Shumei University

実践力育成における臨地実習の意義について、「看護の臨地実習は、看護職者が行う実践の中に学生が身を置き、看護職者の立場でケアを行うことである。この学習過程では、学内で学んだ知識・技術・態度の統合を図りつつ、看護方法を習得する。学生は、対象者に向けて看護行為を行い、その過程で、学内で学んだものを自ら実地に検証し、より一層理解を深める。言い換えると、看護の方法について、「知る」「わかる」段階から「使う」「実践できる」段階に到達させるために臨地実習は不可欠な過程である。」⁷⁾と示しており、臨地実習の意義は大きく、通常の実習が実施できないことの影響は否定できないと思われた。日本看護系大学協議会の調査(2020)⁸⁾、「感染下における看護系大学への影響及び対応に関する調査」第2報で、臨地実習を変更した大学48.7% (n=115)、学内演習に関する変更49.6% (n=117)、授業に関する変更72.6% (n=117)と報告された。大森は、「コロナ禍における看護学生の臨地実習の代替実習に関する文献検討」の中で、「オンライン実習では、動画や教員が模擬患者を演じて実習した場合であっても、信頼関係の構築ができなかったことや、看護技術やコミュニケーション等の経験不足などの課題があった。」⁹⁾と述べている。また、三浦は、「COVID-19感染拡大下における看護学教育に関する公官庁の動向と学生が認識した臨地実習での学習経験」¹⁰⁾の中で、「臨地実習では、患者を理解するための情報の選択と本物の対象者からの情報収集、患者にコミットメントし看護を創造する醍醐味が味わえること、チームで実践していく際のコミュニケーションや意思決定について経験できることが示唆された。」と述べているが、臨地実習をCOVID-19の影響を受ける前に履修できた学生とCOVID-19の影響下で履修した学生とでは、卒業後の業務遂行にかかわる知識・技術に基づく実践力に何らかの影響があったのではないかと思われ、コロナ禍での臨地実習を実施するにあたり、看護系大学がどのような対応を行い、学生の学修上の課題をどのように捉えているのかという疑問を持った。

看護職員として受け入れた医療施設側も対策を講じなければならない状況になったのではないかと考えられた。

本研究では、看護系大学のコロナ禍における臨地実習方法等の変更に伴う学修課題について明らかにすることを目的に取り組んだ。

II. 目的

本研究の目的は、文献検討を通してコロナ禍で実施された看護系大学における臨地実習の変更内容と変更に伴う学修の課題について明らかにすることである。

III. 用語の定義

本研究における「コロナ禍で看護基礎教育の臨地実習」とは、看護師養成課程があり2020年から2021年に臨地実習を履修する学生が在籍していた大学において、令和2年の厚生労働省・文部科学省の事務連絡を受けて、臨地実習実施においてなんらかの変更・対応を行い実施した臨地実習とする。また、本研究における「学修課題」とは、看護系大学がコロナ禍において実習方法等を変更して実施した結果、学修効果として十分な成果を得られなかった内容を指して「学修課題」と表現した。

IV. 方法

1. 対象文献

看護系大学の臨地実習でコロナ禍の影響を受けた期間を2020年～2022年と設定した。2022年5月の時点で文献検索を行い、2020年～2022年に公表された看護系大学の臨地実習に関する論文の内、会議録、報告書を除く原著論文のみを対象とした。「看護基礎教育」、「臨地実習」、「コロナ禍」を検索キーワードとし、データベースは医学中央雑誌 Web版 (Ver. 5)を用いた。看護系大学における研究であること、研究目的・研究方法・研究結果を確認し本研究の目的に合致している16件の文献を研究対象とした。

2. 分析方法

対象文献をコロナ禍の臨地実習の実施内容について通常の実習内容から変更した内容の記述、実施方法等の変更による学修課題に着目して熟読し、該当する文節、文言を抽出し、文献レビューマトリックスを作成した。文献レビューマトリックスを基に、研究目的に該当する文節や文言の内容・意味を類似性、相違性にに基づき分類した。また、学生の学修課題に関する記述内容については、内容の類似性に基づきカテゴリー化し、質的記述的に分析し、コロナ禍の臨地実習の学修課題について検討した。

抽出した文節や文言の内容については、元文献の記述内容を十分に熟読し、理解した上で齟齬のないように検討の上で実施した。

表1 文献レビューマトリックス

No.	著者名	タイトル・発行年	研究対象者	研究方法	研究結果
1	黒河内仙奈、間瀬由紀、安藤里恵	コロナ禍におけるオンラインシステムを導入した高齢者看護学実習の評価と課題 学生事後アンケートの分析から 2022年	研究対象者	研究方法	研究結果
2	磯村聡子、守田孝恵、斎藤美矢子、他	COVID-19の影響下でオンラインを利用した公衆衛生看護学実習の成果と課題 2022年	2018年～2020年に公衆衛生看護学実習を履修した4年次看護学生(有効回答217)の学習到達度を2020年と2018年、2019年と比較した質問紙調査。3週間の実習をオンラインまたは1週間臨地実習、2週間オンライン実習(担当教員が公衆衛生看護学実習の実践に解説)2020年では学習到達度6割未満の項目が8項目(15.1%)であった。それらは、【保健師活動の家庭訪問】、【看護学の各分野の概論の統合と地域看護の実践】の2つのカテゴリに含まれていた。		
3	大池真樹他、鈴木祐子、大槻久美、他	COVID-19下での看護学実習における学習活動の実態 -自己評価尺度と質問紙を用いた調査結果- 2022年	看護学科学学生61名を対象に、中間(有効回答42)、終了時(有効回答33)の2回、実習活動の実態に関するWEBアンケート調査。学生個々によって臨地で実習できた時間数に差があり、学生1人当たり5-16単位で平均12.0だった。実習終了時の下位評価項目で最も低かった項目は、I「経験したことや学んだことを生かしながら、実習目標達成を目指す行動」、IV「他の人の技術や態度から模範を見出し、取り入れようとする行動」だった。		
4	白蓋真弥他、網木政江、浅海菜月、他	新型コロナウイルス感染症拡大におけるA大学看護学生の卒業看護実践能力到達度に関する調査-自己評価表を用いて- 2021年	2020年度卒業生77名、既卒生56名を対象とした。既卒生との看護実践能力到達度順位比較のための自己質問紙調査。83.4%が実習中実習形態に変化があった。臨地の日数・時間短縮は79.8%、学内実習への変更は78.7%。既卒生との看護実践能力到達度順位比較で低下した項目は、「実践する看護の根拠(もしくは法的)と方法について、人々に合わせた説明ができる。」「慢性的・不可逆的健康課題を有する患者と家族の状況をアセスメントし、疾病・障害に対応する看護援助方法について指導のもと実施できる。」など6項目だった。		
5	平山裕子、辻脇邦彦、山口恵、他2名	ニューノーマル時代を見据えた精神看護学実習 2020年度精神看護学における遠隔教育による臨地実習の現状 2021年	2020年度看護学3年生107名の精神看護学実習をリモート実習の履修者を対象としたアンケート調査。精神看護学実習(2週間10日間)で(Microsoft Teams)を活用した2週間の遠隔教育(リモート実習)を実施し、ITを活用した新たな試みを実施した。アンケートの自由記載の分析を行った結果、精神看護学実習の難易度では、普通56%、難しかった25%、優しかった14%、とても良かった5%。難易度の高かった項目は、「プロセスレコードの作成」、「対象者との会話」、「看護過程の作成」など8項目だった。		
6	香川将大、渡邊美和、岡本佐智子	COVID-19禍の成人看護学実習I(急性期)におけるブレンドラーニングの実践報告 2021年	2020年8月31日から2020年12月4日までに成人看護学I(急性期)実習を終了した51名の自己評価について記述したデータを体系的に分析した記述的質的研究。実習形態は、シミュレーション、ロールプレイを中心とした対面授業と動画によるオンライン学習を組み合わせたブレンドラーニングとした。実習方法は、全学生2事例の看護過程を展開した。結果、実習目標の達成にできなかったことは、「患者とのコミュニケーション技術が未熟だった」、「周手術期看護に関する知識が足りなかった」など5つのカテゴリが抽出された。		
7	澤田みどり、高波澄子	旭川大学保健看護学における新型コロナウイルス感染症に伴う看護学実習への影響と今後の課題 2021年	学内臨地実習を受けた2020年度4年生49名と看護学所属の教員で学内臨地実習の指導に携わった24名を対象としたアンケート調査。各看護学領域における工夫や教材への取り組みと指導にかかわった教員及び臨地実習を体験した学生の意見を聞き、草集案をまとめた。【環境設定】設備の整った実習室が2つしかなく、使用調整を行ったが技術演習の確認や追加演習など、必要時に満足に利用できなかった。【事例と教材】臨床に近くリアルティのある患者・家族像を提示して実施した。		
8	本田光、近藤圭子、田中里恵他1名	新型コロナウイルス感染症(COVID-19)拡大に伴い実施された保健師基礎教育における代替の実習の実践報告 2021年	対象者は、公衆衛生看護学実習を履修した4年次学生29名。保健師教育の代替的実習の実態アンケート分析。実習形態は、10日間はオンライン実習のみ、18日間はオンラインと対面の組み合わせで実施した。有効性の評価が低かったのは、家庭訪問、職場巡回、健康危機管理などだった。「実際の家庭訪問は、家庭の様子や周辺環境を観察することが出来ていない」というのが学内実習ではできないことや「ロールプレイでは(問題状況が発生することはないので)、新規の情報がなく、訪問後の再アセスメントが困難であった」。産業界における健康相談に関して、「対象者の職場を知っているわけではないので、一般的なイメージから予測することしかできなかった」があった。		
9	佐野ひろ、奈古由美子	在宅看護学における応用実践力の向上に向けた取り組みwith COVID-19 2021年	看護学4年生31名を対象に、在宅看護の実践ならではの姿勢と視点、また基礎実践力に基づく応用実践力を培うためにオンライン実習を実施した在宅看護学実習(学内実習)における学生の学習効果について評価した。評価項目(大項目8項、小項目5項)を5段階評価で教員と学生双方で実施した。結果、家庭訪問技術の平均点:18.9/20点、在宅療養療法の平均点:17.7/20点。自由記載の内容のカテゴリは、「緊張する」、「マナーを守る」、「HOTの管理・移乗時の対応」、「ケアの実施を忘れる」が抽出された。		
10	和田恵美子、武田未央、内貴千里	新型コロナウイルス感染症拡大下の在宅看護学実習-遠隔実習の組み- 2021年	対象者は、在宅看護学実習を終了した学生80名。在宅看護学実習後のアンケートの集計と実習施設の実習指導者の実習への意見を分析した。在宅看護学実習(事例学修2事例)に変更、実習スケジュールは、①ペーパーベースの患者1名の看護過程の展開の実践、②DVDの視聴(訪問看護師のDVDと通所施設の実践動画)、③web講義(初回講義の動画を録画し、以後録画講義)、④実習指導者とのwebカンファレンス、⑤実習支援メンバー(2-4名)によるグループワーク、⑥実習施設メンバーの合流(6-8名)カンファレンス、⑦個人ワーク、⑧教員の個別指導の8項目の内容を実施した。結果は、webカンファレンスやweb講義の学習効果は高かった。学生の在宅実習への興味・関心が実習前にはばらつきがあったが、実習後には高値へと変化した。		
11	渡部幸子、大澤豊子、谷口友子	COVID-19禍における保健師学生への健康保健教育の実践報告-市町村実習を臨地実習から学内実習に変更して- 2020年	公衆衛生看護学実習I(保健師・市町村)、公衆衛生看護学実習II(企業・学校)を学内実習に変更。保健師課程4年生20名を対象にした。実習形態は、実習前の2020年3月に学生が地区調査をした状況を基にオンライン検索と学内実習を併用して実施した。結果、地区診断で明確になった健康問題と地区調査をした際の地域の状況に関連付け、そこに住む住民をイメージし、どうしたらその地域の特色を踏まえて生活習慣の行動変容を促してあげるかを考えていた。地域診断を進めていくに従って地域や住民を身近に感じ、住民への支援をどうしたらよいかという保健師の視点に立っていた。		
12	大島和子、鈴木由紀子、駒井里枝、他1名	コロナ禍における成人看護学実習I(慢性期看護実習)-臨床実習指導者と教員の共同による実習指導の取り組み第1報- 2020年	成人看護学実習I(慢性期看護実習)を学内実習主体へと変更した。学内実習主体とした実習を組み立てる上で、実習目的・目標を達成すべき方法であること、臨床実習指導者と教員との協働による実習指導について検討した。対象者は看護学3年生91名。結果、実際の患者情報で看護過程の展開を行い、日常生活援助とセルフケア指導を学内で実施。本来の実習の目的・目標を達成することや、臨床指導者と教員の協働による実習指導を重点課題とし、臨床実習指導者と教員との協働による実習指導について検討し、実習展開に取り入れた。		
13	喜多村定子、吉岡恵、塩入とろ子、他3名	COVID-19流行下における看護総合実習(成人看護学領域)の学内実習の報告 2021年	看護総合実習(成人看護学領域)を学内実習に変更。看護学4年生対象学生18名を対象に実施した学内実習の実践報告。実習形態は、週に2-3回登校日として、2コマ(3時間)を用いて対面での演習及びカンファレンスを行った。それ以外は自宅学習日として自己学習及びWeb会議ツール(Microsoft Teams)を用いたグループ別状況確認・カンファレンス・質疑応答を全日行った。Web会議ツール(Microsoft Teams)を活用。シャワー浴時に起こる可能性のある症状は考えることができたが、出現した症状への対応や急変時の対応に関しては、助言を受けて気づくことができた。退院後の患者の生活をどんな環境であればセルフケアや社会参加が可能かを考えられた。		
14	太田晴美、大崎真、早坂美子	新型コロナウイルス禍の学内統合実習看護実習評価-学生アンケート結果から- 2021年	対象者は看護学4年生80名。統合看護実習を学内実習に変更し終了時に、学内統合看護実習を評価し、今後の課題について明らかにすることを目的としてアンケート調査を実施。実習内容は、時間数を変更せずに実習形態を①Google Classroomを利用した自習課題、②対面実習、③面接、④自己学習で構成した。統合実習の改善点として「ICT環境【教育環境】」「将来の不安【実習形態】」「連絡事項【消毒・清掃】」「ソーシャルディスタンス【教員の対応】」などが抽出された。		
15	作山美智子、安藤利香、小笠原喜美代、他1名	在宅看護学における学年交流授業の教育効果 2021年	在宅看護学の授業に、2020年7月にCOVID-19対策のため臨地実習が学内実習に切り替わった在宅看護学実習(4年次生13名)が3年生61名と一緒にロールプレイに参加。実施後の自己評価の自由記載内容をコード化し、カテゴリ化した。ロールプレイの内容は、アネロイド血圧計による血圧測定、事例(食事指導)のロールプレイの結果、3年生の異学年交流で良かったこと、【実習経験からのアドバイス】【知識・理解を深める】【教育環境の充実】【実習への拡大】【看護観】、4年生では、【楽しい】【自己成長の確認】【回想】【学び力を高める】。		
16	篠原幸恵、讀井真理、河野保子他	看護系大学コロナ禍における基礎看護学実習Iの学内実習の実態と教育の質の確保に関する検討 2020年	基礎看護学実習Iを学内実習に変更した。対象者1年生20名に不安の有無についてアンケート調査を実施した。結果、急遽変更になった基礎看護学実習Iに不安であると回答した者が15名(75%)、不安がないと回答したものが5名(25%)だった。「不安である」と回答した者と「不安がない」と回答した者を2群に分け、実習目標ごとに「達成できたか」「達成できなかった」人数をFisherの正確検定で分析した結果、「医療分野における看護職者の役割の理解度」、「医療分野における看護の機能の理解度」において、不安がない者の方が理解できない傾向にあった。		

V. 倫理的配慮

本研究は文献研究である。公表された文献を対象とし、分析対象文献を論文中に示す場合には、内容の虚偽改竄にあたらないよう十分に配慮して実施した。引用した文献には番号を付け、最後に引用文献を掲載することで著作権を遵守した。

VI. 結果

1. 文献レビューマトリックス

研究対象となった16件の文献を著者名、タイトル、発行年、研究対象者、研究方法、研究結果の項目に沿って、マトリックスを作成し表1に示した。論文として公表された年別論文数は、2020年3件、2021年10件、2022年3件だった。調査方法は、アンケート調査11件、実践報告2件、学生の自己評価・レポート等提出物の分析4件だった。アンケート調査や自己評価・提出物分析では、質的記述研究方法でカテゴリーを抽出し研究目的に沿った結果を導いていた。実践報告では、自己評価尺度を用いた学修の分析、看護実践能力到達度の分析を実施していた。

文献レビューマトリックスを基に、各研究論文に示された変更された実習内容・形態と学修課題について表2に示した。

2. 実習内容・形態の変更内容

1) 文献で取り上げられた看護学別実習件数

研究の対象とした実習を看護学別でみると、基礎看護学1件、成人看護学2件、高齢者看護学1件、精神看護学1件、在宅看護学3件、公衆衛生看護学3件、統合（総合）看護2件、看護学実習全般3件だった。

2) 実習内容・形態

表2から実習方法・内容の変更点は3つに大別された。1つ目は、臨地実習日数・時間の短縮、臨地と学内をミックスした実習形態への変更で、具体的には臨地実習日数の短縮、1日の実習時間の短縮、臨地実習プラス学内実習、学内実習（臨地実習日数を減らし、学内実習日を増やす）だった（対象文献No. 3-4）。2つ目は、臨地実習期間を変えずに学内実習に変更した（対象文献No. 6-9, 11-16）。学内実習の内容は、模擬事例の看護過程の展開、模擬病棟での実習、シミュレーターや模擬患者を設定したロールプレイ・看護技術演習、映像学修とグループ討議、教員が撮影した動画学修、学年交流授業などであった。3つ目は、臨地実習期間を変えずにリモート実習に変更し

た場合では、学生は実習期間の大半を自宅学修し一部を学内で学修する形態で行われた（対象文献No. 1-2, 5, 10）。リモート実習の内容は、Information Communication Technology : ICT を駆使し、事例学修、カンファレンス、外部講師によるWeb講義、病棟実習指導者による実習内容に沿った講話・体験談・カンファレンス、受け持ち患者とリモート対話による情報収集、自己学修支援・指導などだった。ICTとして用いられていたソフトは、Microsoft Teams、Google Classroomだった。自宅学修支援・指導においては、文字入力によるチャット方式の指導や実習グループの他の学生と共有の場で用いられていた。

3) 実習内容・形態を変更したことによる学修課題

臨地実習を変更して実施した結果について表2にまとめた。表2を基に学修課題として述べられている部分に焦点を当て、対象論文により結果表現が異なることを考慮し、文節、文章、文言を単位とし抽出後にコード化し、カテゴリーで分類した結果を表3に示した。【 】をカテゴリー、[]をサブカテゴリー、〈 〉をコードとして記述する。

実習内容・形態を変更したことによる学修課題は、【看護の知識】、【看護の技術】、【看護活動】、【教育方法】、【教育環境】、【学修行動】の6つのカテゴリーが抽出された。

カテゴリー【看護の知識】には、〔看護過程の展開〕、〔アセスメント〕、〔チーム医療と看護の役割〕がサブカテゴリーとして含まれた。〔看護過程の展開〕には、〈看護過程の作成〉など6つのコードが含まれた。〔アセスメント〕には、〈回復過程にある患者・家族の状態アセスメントし、他（多）職種連携の下で早期からリハビリテーションを通して、回復を促進するための基本的な看護援助方法が実践できる〉、〔チーム医療と看護の役割〕には、〈医療分野における看護職者の役割の理解度〉など2つのコードが含まれた。カテゴリー【看護の技術】には、〔看護提供時の技術〕、〔コミュニケーション技術〕、〔対象に合わせた看護の提供技術〕、〔多職種との連携〕がサブカテゴリーとして含まれた。〔看護提供時の技術〕には、〈基本的な看護技術援助を修得し、指導の下で実施できる〉など5つのコードが含まれ、〔コミュニケーション技術〕には、〈情報収集でのコミュニケーション技術〉など3つのコードが含まれた。〔多職種との連携〕には、〈安全なケアチームとして組織的に提供する意義について理解できる〉など3つのコードが含まれた。カテゴリー【看護

表2 変更した実習内容・形態と実施した結果

No.	実習名(調査内容)・学修方法	実施した結果
1	高齢者看護学実習 病棟実習3-4日に短縮、認知症外来実習は臨地で実施。 模擬病棟実習(オンライン実習)学生グループに患者役の教員を1名配置、オンラインでコミュニケーションによる情報収集の実施。学内で技術演習、学内認知症看護実習、危険予知トレーニング、介護予防教室の企画・実施。	学生個々に実習形態が異なる不公平感が課題となった。オンラインによる情報収集でのコミュニケーションで、教員が患者役であることが困難を感じる要因だった。
2	公衆看護学実習 オンライン実習 担当教員が公衆衛生看護活動を実践的に解説した。	学修到達度6割未満の項目は、「保健師活動の家庭訪問」の「対象を把握したプロセス」、「対象への連絡方法と家庭訪問の約束の仕方について説明する」、「訪問計画を立てる」、「家庭訪問の評価方法を説明する」、「家庭訪問した事例と保健師との関係を説明する」、「家庭訪問記録用紙(様式3・4)に的確に記載する」、「看護学の各分野の概論の統合と地域看護学の実践」の「保健師が行う看護研究の実際を理解する」。
3	看護学実習(6領域) 臨地実習+学内実習 学生1人当たり5-16単位で平均12単位を臨地で実施。	学生個々によって臨地で実習できた時間数に差があり、学生1人当たり5-16単位で平均12.0だった。 実習終了時の下位尺度得点で最も低かった項目は、I「経験したことや学んだことを生かしながら、実習目標達成を目指す行動」、IV「他の人の技術や態度から模範を見出し、取り入れようとする行動」だった。
4	卒業時看護実践能力到達度(既卒生と卒業生の比較) 臨地実習+学内実習 臨地の日数・時間短縮は79.8%、学内実習への変更は78.7%。	既卒生との看護実践能力到達順位比較で下降した項目は、「実践する看護の根拠(もしくは目的)と方法について、人々に合わせた説明ができる」、「慢性・不可逆的健康課題を有する患者と家族の状態をアセスメントし、疾病・障害に対応する看護援助方法について指導の多と実施できる。」「回復過程にある患者・家族の心身の状況をアセスメントし、他(多)職種連携の下で早期からリハビリテーションを通して、回復を促進するための基本的な看護援助方法が実践できる。」「基本的な看護技術援助を修得し、指導の下で実施できる。」「保健医療福祉における看護サービスを提供する仕組み、看護の機能と看護活動のありかたについて理解できる。」「安全なケアをチームとして組織的に提供する意義について説明できる。」の6項目だった。
5	精神看護学実習 リモート実習 Microsoft Teamsを活用した2週間の遠隔教育(リモート実習)。事業所の対象者と学生がリモート対話の実施。精神関連を題材とした映画鑑賞により精神保健福祉医療に対するイメージ化。	難易度の高かった項目は、「プロセスレコードの作成」、「対象者との会話」、「看護過程の作成」、「映像鑑賞とカンファレンス」、「プロセスレコード」、「課題レポート」、「実習指導者との打合せと振り返り」「成果発表」だった。
6	成人看護学実習I(急性期) 学内実習 シミュレーション、ロールプレイを中心とした対面授業と動画によるオンライン学習を組み合わせたブレンドラーニング。	実習目標の達成に足りなかったことは、「患者とのコミュニケーション技術が未熟だった」、「両手術看護に関する知識が足りなかった」、「個別性のある看護計画・実践が足りなかった」、「看護過程を展開する上で根拠が不足していた」、「看護展開に必要な多くの情報を統合することが困難であった」の5項目だった。
7	看護学実習 学内実習 環境としての場の設定(実習室使用の調整) 事例と教材:臨床に近くリアリティのある患者、家族像の提示(既存教材上の事例や、同意を得た患者事例の活用)、視覚教材(市販・教員作成)と録音・録画の動画を利用し振り返りディスカッションをした。シミュレーター機器やモデル人形、学生・教員の模擬患者を活用した。	「環境設定」実習環境の設定について教員・学生共に半数以上のものが「適切である」と回答していた。しかし、設備の整った実習室が2つしかなく、使用調整を行ったが技術演習の確認や追加演習など、必要時に満足いく利用ができなかった。
8	公衆衛生看護学実習 学内実習(体験実習) 対面(半日)と遠隔授業システムを使用した遠隔実習の併用。視覚教材(動画)を活用。WEBミーティング、ロールプレイを取り入れた。	「実際の家庭訪問は、家屋の様子や周辺環境を観察することも含まれていると思うが学内実習ではできない」や「ロールプレイでは(問題状況が発生することはないので)、新規の情報がなく、訪問後の再アセスメントが困難であった」。 職場巡視は、「対象者の職場を知っているわけではないので、一般的なイメージから予測することしかできなかった」
9	在宅看護学実習 学内実習 介護ベッド上看護教育用モデル(フィジコ)、服薬連絡装置ハイサンリ、看護実践に必要な物品・バックの準備	自由記載の内容のカテゴリーは、「緊張する」、「マナーを守る」、「HQTの管理・異常時の対応」、「ケアの実施を忘れる」が抽出された。教育内容や方法の再検討が必要。
10	在宅看護学実習 遠隔実習 ペーパーバイシエント(1名の療養者)の看護過程の展開、DVD視聴(訪問看護師のDVD、通所施設の撮影動画)遠隔を中心とした実習指導(訪問看護師、ケアマネージャー、通所サービス看護師など)webカンファレンス、多職種(在宅医、薬剤師、在宅歯科医)のweb講義	実習スケジュールは、①ペーパーバイシエントの患者1名の看護過程の展開の実践、②DVDの視聴(訪問看護師のDVDと通所施設の撮影動画)、③web講義(初回のクルの場面の録音、以後録音講義)、④実習指導者とのwebカンファレンス、⑤実習支援メンバー(2-4名)によるグループワーク、⑥実習施設メンバーの合流(6-8名)カンファレンス、⑦個人ワーク、⑧教員の個別指導の8項目の内容を実施した。結果は、webカンファレンスやweb講義の学修効果は高かった。学生の在宅実習への興味・関心が実習前にはばらつきがあったが、実習後は高値へと変化した。
11	公衆衛生看護学実習I(保健所・市町村) 公衆衛生看護学実習II(企業・学校) 学内実習 実習前に学生が地区調査をした状況を基にオンライン授業と学内実習を併用して実施した。	地区診断で明確になった健康問題と地区調査をした際の地域の状況に関連付け、そこに住民をイメージし、どうしたらその地域の特性を踏まえて生活習慣病の行動変容を促していけるかを考えていた。地域診断を進めていくに従って地域や住民を身近に感じ、住民への支援をどうしたらよいかという保健師の視点に立っていた。
12	成人看護学実習I(慢性期看護実習) 学内実習 臨地実習1日、学内実習14日に臨地実習日を減らした。実習施設を6病院から2病院に減らした。慢性期疾患を持った1人の入院患者を受け持ち、看護過程を展開(情報収集・整理、アセスメント、看護問題の抽出、看護計画の立案と実施、評価)。学内で看護計画に基づいた日常生活の援助とセルフケア指導を実施。	実際の患者情報で看護過程の展開を行い、日常生活援助とセルフケア指導を学内で実施。本来の実習の目的・目標を達成することや、臨床指導者と教員の協働による実習指導を重点課題とし、臨床実習指導者と教員との協働による実習指導について検討し、実習展開に取り入れた。
13	看護総合実習(成人看護学領域) 学内実習 対面で演習及びカンファレンス、自宅学修 web会議ツール(Microsoft Teams)を活用してグループ別状況確認・カンファレンス・質疑応答を実施した。	術後初歩の手順や観察の根拠は理解できた。患者役を通して、ルート類などが抜けていないか不安になる等の気持ちを体験できた。シャワー浴時に起こる可能性のある症状は考えることができたが、出現した症状への対応や急変時の対応に関しては、助言を受けて気づくことができた。退院後の患者の生活をADLのみではなく、IADLやICTモデルを活用して、どんな環境であればセルフケアや社会参加が可能かを考え、チーム発表を通して討議し、患者の仕事の中でできそうなことを考えられた。
14	統合実習看護実習 学内実習 対面学修、面接、自己学修 ICT教育システム(Google Classroom)を活用した。	統合実習の改善点として「ICT環境」、「PC使える時間確保」「リモート・対面を確認した方が良い」「音声聞きながら入力できると良い」「PC不具合」、「教育環境」:「座席(真ん中立てない)」「少人数で行いたい」「自己学修時の環境(友達か誰か)」「教室が寒い」、「将来の不安」:「複数患者の受け持ちは不安」「複数患者の受け持ちができて残念」「看護師の怖さを実感した」、「実習形態」:「1日の課題を朝出すと良かった」「皆で考える授業があっても良かった」、「連絡事項」:「紙媒体の提出がわかりにくかった」「クラスルームの連絡が複数になると混乱」「変更点が紛らわしい」「ミーティングを短くしてほしい」、「消毒・清掃」:「掃除の分担」「掃除のシステム」、「ソーシャルディスタンス」:「人と人との距離に近い」「行動報告時、人と人との距離が近い」、「教員の対応」:「日々の姿勢でアドバイスが響かない」「他の学生対応している教員に聞けない」「多くの教員に教室に来てほしい」「顔と名前を一致させてほしい」「音声だけでは伝えたいことがわからない教員がいた」、「その他」が抽出された。
15	在宅看護実習 学内実習 学年交流授業(ロールプレイ)	ロールプレイの結果、3年生の異学年交流で良かったこと、「実習経験からのアドバイス」【知識・理解を深める】【教育環境の充実】【実習への拡大】【看護観】。4年生では、「楽しい」「自己成長の確認」「回想」「学び力高め」。
16	基礎看護学実習I 学内実習 模擬病棟(基礎看護学実習室のレイアウトをナースステーション、4人病床の大部屋、検査室を設置)	「不安である」と回答した者と「不安がない」と回答した者を2群に分け、実習目標ごとに「達成できた」、「達成できなかった」人数をFisherの正確検定で分析した結果、「医療分野における看護職者の役割の理解度」(p=.08)、「医療分野における看護の機能の理解度」(p=.08)において、不安がない者の方が理解できなかったと回答する傾向があった。

表3 変更した実習方法における学修課題

カテゴリ	サブカテゴリ	課題コード
看護の知識	看護過程の展開	<ul style="list-style-type: none"> 実践する看護の根拠（もしくは目的）と方法について、人々に合わせた説明ができる。 看護過程の作成 周手術期看護に関する知識が足りなかった 個性のある看護計画・実践が足りなかった 看護過程を展開する上で根拠が不足していた 看護展開に必要な多くの情報を統合することが困難であった
	アセスメント	<ul style="list-style-type: none"> 回復過程にある患者・家族の心身の状況をアセスメントし、他（多）職種連携の下で早期からリハビリテーションを通して、回復を促進するための基本的な看護援助方法が実践できる。
	チーム医療と看護の役割	<ul style="list-style-type: none"> 医療分野における看護職者の役割の理解度 医療分野における看護の機能の理解度
看護の技術	看護提供時の技術	<ul style="list-style-type: none"> 慢性・不可逆的健康課題を有する患者と家族の状態をアセスメントし、疾病・障害に対応する看護援助方法について指導のちと実施できる。 基本的な看護技術援助を修得し、指導の下で実施できる。 マナーを守る HOTの管理・異常時の対応 ケアの実施を忘れる
	コミュニケーション技術	<ul style="list-style-type: none"> 情報収集でのコミュニケーション 対象者との会話 患者とのコミュニケーション技術が未熟だった
	多職種との連携	<ul style="list-style-type: none"> 回復過程にある患者・家族の心身の状況をアセスメントし、他（多）職種連携の下で早期からリハビリテーションを通して、回復を促進するための基本的な看護援助方法が実践できる。 保健医療福祉における看護サービスを提供する仕組み、看護の機能と看護活動のありかたについて理解できる。 安全なケアをチームとして組織的に提供する意義について説明できる。
看護活動	地域での看護活動	<ul style="list-style-type: none"> 対象を把握したプロセス 対象への連絡方法と家庭訪問の約束の仕方について説明する 訪問計画を立てる 家庭訪問の評価方法を説明する 家庭訪問した事例と保健施策の関係を説明する 家庭訪問記録用紙に的確に記載する 保健師が行う看護研究の実践を理解する 実際の家庭訪問は、家屋の様子や周辺環境を観察することも含まれていると思うが学内実習ではできない 職場巡視は、対象者の職場を知っているわけではないので、一般的なイメージから予測することしかできなかった
教育方法	教育の方法と手段	<ul style="list-style-type: none"> 教員が患者役 プロセスレコードの作成 映像鑑賞とカンファレンス ロールプレイでは（問題状況が発生することはないので）、新規の情報がなく、訪問後の再アセスメントが困難であった ペーパーベシエントの患者1名の看護過程の展開の実践 DVDの視聴（訪問看護師のDVDと通所施設の撮影動画） 実習支援メンバー（2-4名）によるグループワーク 実習施設メンバーの合流（6-8名）カンファレンス 将来の不安（複数患者の受け持ちは不安、複数患者の受け持ちはできず残念）
教育環境	教育環境と設備	<ul style="list-style-type: none"> 設備の整った実習室が2つしかなく、使用調整を行ったが技術演習の確認や追加演習など、必要時に満足のゆく利用ができなかった。 実習指導者との打合せと振り返り 教員の個別指導 ICT環境 教育環境 実習形態 連絡事項の伝達 教員の対応
	感染予防	<ul style="list-style-type: none"> 消毒・清掃 ソーシャルディスタンス
学修行動	学修行動	<ul style="list-style-type: none"> 経験したことや学んだことを生かしながら、実習目標達成を目指す行動 他の人の技術や態度から模範を見出し、取り入れようとする行動 課題レポート 成果発表 緊張する 個人ワーク

活動】のサブカテゴリは〔地域での看護活動〕で、〈対象を把握したプロセス〉など9つのコードが含まれた。カテゴリ【教育方法】のサブカテゴリは〔教育の方法と手段〕で、〈教員が患者役〉など9つのコードが含まれた。カテゴリ【教育環境】には、サブカテゴリ〔教育環境と設備〕、〔感染予防〕が含まれた。〔教育環境と設備〕には、〈ICT環境〉など8つのコードが含まれた。〔感染予防〕には、〈消毒・清掃〉、〈ソーシャルディスタンス〉の2つのコードが含まれた。カテゴリ【学修行動】のサブカテゴリは〔学修行動〕で、〈経験したことや学んだことを生かしながら、実

習目標達成を目指す行動〉など6つのコードが含まれた。

VII. 考察

本研究は、看護系大学のコロナ禍における臨地実習方法等の変更に伴う学修課題について明らかにすることを目的に文献を基に検討した。研究対象とした文献で取り上げている実習は、看護基礎教育における臨地実習で、基礎看護学、成人看護学、高齢者看護学、精神看護学、在宅看護学、公衆衛生看護学及び総合（統合）実習で、小児看護学、母性看護学は含まれなかつ

た。コロナ禍の期間を設定し、文献発行年を限定して検索を行ったための偏りであると考えられた。

表2から実習方法・内容の変更は3つ大別された。1つ目、臨地実習日数・時間の短縮、臨地と学内をミックスした実習形態に変更した場合は、受け持ち患者と対面できない場合、病棟でカルテや担当看護師から患者情報を得ることで、臨地実習ならではの緊張感をもって、病院内の雰囲気や看護師の活動の様子を学生自身で見て感じとれたと思われる反面、情報収集後の看護過程の展開におけるアセスメント、看護計画の立案、看護ケアの実施・評価は、学内で学生同士または担当教員を患者役として実施するなどの変更があり、模擬患者では表現が難しい心身状況等が実際はありと思われ、実際の患者を対象とした看護過程の学修到達度には至らなかったのではないかと考えられた。2つ目、臨地実習期間を変えずに学内実習に変更した場合は、臨地実習を再現するには、病院環境、人的環境（実際の患者の心身状況）の限界があり、研究対象となった看護学実習の到達目標の一部を変更または、到達レベルの難易度を下げるなどの変更をせざるを得なかったのではないかと考えられた。しかし、可能な限り臨地実習に近づけた実習内容とする工夫として、看護教育用の映像や担当教員が撮影した動画などが取り入れられていたこと、学生・担当教員とのカンファレンスにICTを活用して実習施設の指導者（看護師等）がリモートで参加するなど臨場感のある実習形態も報告されており、大学と実習施設とをICTの活用で繋ぐことによって、臨地実習に近い学修効果も期待できるのではないかと考えられた。3つ目、臨地実習期間を変えずにリモート実習に変更した場合は、学生は実習期間の大半を自宅学修し一部を学内で学修する形態で行われた。リモート実習では、COVID-19の感染の機会を極力減らした環境の確保が実現できた反面、自宅学修は学生一人の環境で進められ、グループ学生との情報共有や実習施設指導者からのリアルタイムのアドバイスや指導が受けられないので、学びの到達度に限界があると思われた。学修の質を確保するための困難性をICTの活用で補っているため、看護の知識を修得する上では、臨地実習との差は小さかったと思われた。しかし、看護の技術面では、病院内での緊張感や実際の患者との対話から修得するコミュニケーション力、看護過程の展開つまり、情報収集、アセスメント看護計画立案、看護ケアの提供に伴う観察や根拠の明確化など看護の基本的な実践能力に関する面

では、臨地実習を代替するには困難な点が多いと思われた。

新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議報告書の中で、『臨地でしか学ぶことのできない内容の具体』¹¹⁾として、『人間の五感を通してキャッチされる臭いや、その場の空気感と言ったシミュレーションでは再現困難な感覚、乳幼児の啼泣や離島・過疎地域に住む対象者の生活といったリアリティ、倫理的な課題が生じる場合の医療者の苦悩を知ることなど』を挙げている。本研究では、学修課題をカテゴリー分類し6つのカテゴリーが抽出された(表3)。カテゴリー【看護の知識】にはコード、〈看護の根拠・方法の説明〉、〈個別性〉、〈情報の統合〉が含まれ、人間の五感を使って得られた情報を統合し、分析した結果から導かれる個別性のある看護の根拠や方法の説明は、シミュレーションでリアリティを追求しても実在する患者の心身の状態に伴う症状や心情を再現することは困難があり学修課題となったと思われた。また、同様に【看護の技術】のコード、〈疾病・障害に対応する看護援助の指導〉、〈マナーを守る〉、〈異常時の対応〉や【看護活動】のコード、〈保健師活動〉、〈家庭訪問〉〈職場のイメージ〉は、対象となる患者や療養者の病状や価値観、家庭環境、居住地域の特性、職場環境などで多様に変化し、リアリティを求めて実習内容を構成しても看護の対象者個々の生活や心情まで表現することは困難であったのではないかと考えられた。また、臨地実習に近づけるための教育方法や環境整備、つまり【教育方法】のコード〈ロールプレイ〉、〈映像鑑賞とカンファレンス〉、〈プロセスレコード〉や【教育環境】のコード〈ICT環境〉、〈実習形態〉、〈教員の対応〉は、これまでも各看護系大学で取り組まれてきた教育環境整備の内容であると言える。しかし、今回のCOVID-19感染症拡大下の実習を経験して、更に改善を要する点があったことが示され、教育方法や教育環境のさらなる整備が進むことで、より効果的な学内実習の方法も報告されるのではないかと考えられた。【学修行動】は、実習の方法・形態にかかわらない学生自身の学修に取り組む課題であり、教員が学生の学修達成のためのサポートを要する課題でもあると言える。三浦は、忠実度の高いシミュレーション実習に置き換えた先行研究結果を踏まえて、『現場にいる時間を規定することで臨地実習における学習の質の保証を行うことの意味合いを検討し直す必要性』¹⁰⁾について報告しているが、本研究にお

いても、学内実習やリモート実習の効果的な学修内容に焦点を当てた研究を実施し、今回の研究結果と合わせて検討・考察することで、学内実習やリモート実習と臨地実習を組み合わせた実習の在り方を模索し、今後も起こりうる新たな感染症拡大下の臨地実習においてより効果的な実習形態の方向性が得られるのではないかと考えられた。

VIII. 結論

看護系大学のコロナ禍における臨地実習方法等の変更に伴う学修課題について明らかにすることを目的に文献検討を行った結果、実習内容・形態の変更は3つに分類された。1つは、臨地実習日数・時間の短縮、臨地と学内をミックスした実習形態に変更した実習、2つ目は、臨地実習期間を変えずに学内実習に変更した実習、3つ目は、臨地実習期間を変えずにリモート実習に変更した実習だった。臨地実習の内容・形態を変更した実習による学修課題は6つのカテゴリーに分類された。カテゴリー【看護の知識】には、人間の五感を使って得られた情報を統合し、分析した結果から導かれる個別性のある看護の根拠や方法の説明がコードとして含まれ、シミュレーションでリアリティを追求しても実在する患者の心身の状態に伴う症状や心情を再現することには困難があり、また、【看護の技術】、【看護活動】は、対象となる患者や療養者の病状や価値観、家庭環境、居住地域の特性、職場環境などで多様に変化し、リアリティを求めて実習内容を構成しても看護の対象者個々の生活や心情まで表現することは困難であったと考えられた。【教育方法】、【教育環境】では、COVID-19 拡大下の実習を経験して、これまでの対応に加えて更に改善を要する項目が示された。今後、学内実習やリモート実習の効果的な学修内容に焦点を当てた研究を実施し、今回の研究結果と合わせて検討・考察することで、今後も起こりうる新たな感染症拡大下の臨地実習において、より効果的な実習形態の方向性が得られるのではないかと考えられた。

IX. 結語

本研究では、COVID-19 の感染症拡大下の看護系大学において取り組まれた臨地実習の実施形態と学修課題に焦点を当てて分析を行った。COVID-19 は終息の見通しが見えないまま、with コロナへと政策は転換されつつある。今後も感染症拡大下での臨地実習指導の継続が予測され、学修効果が期待できる臨地実習の

在り方について、さらに調査研究に取り組むことは意義があると思われた。

利益相反の開示

本研究における開示すべき COI はない。

引用文献

- 1) NHK 特設サイト新型コロナウイルス (2020.1.6, 1.8) : 中国 武漢で原因不明の肺炎 厚労省が注意喚. WHO 新型コロナウイルスを確認.
<<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/chronology/?mode=all&target=202001>>.
- 2) 厚生労働省 (2020.2.28) : 新型コロナウイルス感染症発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について (事務連絡).
<<https://www.mhlw.go.jp/content/000605026.pdf>>.
- 3) 厚生労働省 (2021.6.1) : 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について (事務連絡).
<<https://www.mhlw.go.jp/content/000636146.pdf>>.
- 4) 厚生労働省 (2022.4.14) : 新型コロナウイルス感染症発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応及び実習施設への周知事項について (事務連絡).
<<https://www.mhlw.go.jp/content/000929081.pdf>>.
- 5) 厚生労働省医政局看護課 (2020.6.22) : 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取り扱い等について.
<<https://www.mhlw.go.jp/content/000642611.pdf>>.
- 6) 厚生労働省 (2007.4.26) : 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書.
<<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>>.
- 7) 文部科学省 : 看護実践能力育成における臨地実習の意義.
<https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm#3_1>.
- 8) 日本看護系大学協議会 (2020.4.8) : 新型コロナウイルスの感染拡大にかかる看護系大学への影響

- 及び対応に関する調査結果 第2弾.
(<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/04/coronavirus-cyousakekka2nd.pdf>).
- 9) 大森美保：コロナ禍における看護学生の臨地実習の代替実習に関する文献検討, 帝京科学大学紀要, 18, 157-164, 2022.
- 10) 三浦友里子：COVID-19 感染拡大下における看護学教育に関する公官庁等の動向と学生が認識した臨地実習での学習経験, 聖路加看護学会誌, 24 (2), 51-54, 2021.
- 11) 日本看護協会：新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議 報告書 (2021.6.8)：看護系大学における臨地実習の教育の質の維持・向上について.
(https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/covid_19/faculty/pdf/report_uniforcovid19.pdf)